

夏目漱石『こころ』の教育関係論的解釈

田中裕喜（京都ノートルダム女子大学）

問題の所在

夏目漱石の『こころ』は、高等学校の国語の定番教材になっているので、国民の多くが一度はふれたことのある小説である。登場人物の「先生」とその親友である「K」は、「御嬢さん」のことをともに好きになるが、「先生」が「K」を出し抜くようにして「御嬢さん」への結婚を申し込み、「K」がそのことを知った後に自らの命を絶つというあらすじを覚えている人もいるだろう。けれども、教科書に収録されているのが『こころ』という長編小説のごく一部分であるということを知っている人は、どれくらいいるだろうか。

『こころ』は、1914年の4月から8月にかけて、朝日新聞に百十回にわたって連載された。連載時のタイトルは、『心 先生の遺書』。漱石は、それを単行本にするにあたって、「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三つの部分に区切った。教科書に収録されているのは、教科書会社によって若干の違いがあるものの、ほとんどが「下 先生と遺書」の三十五から四十九のあたりであり、百十回の連載のうちの十五回分くらいである。先に述べたあらすじは、この部分のあらすじにすぎない。

「上 先生と私」「中 両親と私」の「私」とは、「先生」のことを慕っている青年のことである。「先生」と呼んでいるのは「私」であって、「私」以外の人々がその人物のことを「先生」と呼んでいるわけではない。あくまで「私」にとっての「先生」なのである。ところが、教科書に収録されているのは、「私」が「先生」について語っている「上」でも「中」でもなく、「私」が「先生」の遺書を原文のまま転記している「下」の一部である。そのため、「私」と「先生」との関係は、教科書に収録されている部分からはほとんど窺い知ることができない。この部分だけを読んで、果たして『こころ』という小説を読んだことになるのだろうか。

「私（青年）」は、「先生」とのかかわりを通して、「先生」からいったい何を学んだのだろうか。高等学校の授業で『こころ』の「下」の部分扱われる際に、このことが問われることはない。なぜなら、その箇所には「私」と「先生」との関係性が描かれていないからである。しかし、『こころ』という小説全体の構成を考えるならば、「私」が「先生」から何を学んだかは、読者にとっての重要な疑問なのではなかろうか。

そこで、本論では、小説『こころ』を、「私」と「先生」との教育関係という視点から読み直すことを試みたい。具体的には次のように考察を進めることにする。最初に、主に「上 私と先生」に依拠しながら、青年である「私」はどうして「先生」なる人物のことを慕っているのかを明らかにしたい。次に、主として「中 両親と私」に依拠しながら、「私」にとっての「先生」と「両親」との決定的なちがいがどこにあるのかを明らかにしたい。最後に、それらを受けるかたちで、「私」は「先生」からいったい何を学び得たのかという、漱石が『こころ』において直接には描いていないことがらに

について考察することにしたい。そして、これらの探究を通して、『こころ』についてこれまで一般的に言われてきたこと、たとえば『こころ』には「人間の深いところにあるエゴイズムと、人間としての倫理観との葛藤が表現されている」¹というようなこととは異なる読み方を可能にするための新たな道筋を切り開くことを企図するものである。

1 「先生」という近代人との邂逅

私^{わたくし}はその人を常に先生と呼んでいた。だから此^こ處^こでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚^{はば}かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたいくなる。(上 一)²

小説『こころ』「上 先生と私」の書き出しである。「私」は、ある人のことを「先生」と呼んで慕っている。だがそれは、一般にそうであるように、その人が「私」の通っている学校で教師をしているからではない。では、どうして「私」は、その人のことを「先生」と呼んでいるのか。『こころ』は、冒頭部分からして謎めいた小説である。

「私」が「先生」と知り合いになったのは、東京の高等学校の夏期休暇中、避暑のために滞在していた鎌倉においてである。「私」を鎌倉に呼び寄せた友人は先に帰ってしまい、「私」は毎日一人で海水浴に出かけていた。「私」はそこで「先生」に出会う。「私がすぐ先生を見^みつけ^けたのは、先生が一人の西洋人を^づ伴^{ばん}れていたからである」(上 二)。明治末期のわが国で、西洋人と一緒に海水浴をしている日本人は、人目を惹いたにちがいない。しかも、「私」にはその人の顔がどこかで見た事のある顔のように思われた。「私」は、次の日から毎日浜辺に出る度に、「先生」を探すようになる。「先生」と一緒だった西洋人は、その後に姿を見せることはなかった。「先生はいつでも一人であった」(上 三)。そして、「私」は、「先生」が掛茶屋で眼鏡を落としたタイミングで、それを拾い上げながら初めて「先生」に声をかけることで知り合い、やがて「先生」の家を頻繁に訪ねていくようになるのである。

それにしても、夏の避暑地で偶然出会った人物に、「私」は、どうして強く惹かれ、近づかずにはいられないのだろうか。「先生の私に対する態度は初めて挨拶^{あいさつ}をした時も、懇意^{のち}になったその後も、あまり変りはな」(上 六)く、素気なかったにもかかわらず、である。実は、このことは、「先生」にとっても謎だというふうに記されている。この謎に迫るには、「先生」が「私」に対して、自分自身について語っている部分に着目しなければならない。

「私は淋しい人間です」と先生がいった。「だから貴方^{あなた}の来て下さる事を喜こんでいます。だから何故^{なぜ}そう度々来るのかと聞いて聞いたのです」(上 七)

ここで、「先生」は、自分のことを「淋しい人間」とであると語っている。これは、ただ単に、社会的な交際範囲の狭い孤独な人間であるという意味ではない。「先生」の「淋しい」という言葉の使い方は独特である。そもそも、この人物は、自分をあえて「淋しい」状態に置きたがっている。

「私」が「先生」を次に訪問した時には、会話の中でこのように言っている。

「私は淋しい人間ですが、ことによると貴方も淋しい人間じゃないですか。私は淋しくっても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないでしょう。動けるだけ動きたいのでしょう。動いて何かに打つかりたいのでしょう。……」

「私はちっとも淋しくはありません」

「若いうちほど淋しいものはありません。そんなら何故貴方はそう度々私の宅へ来るのですか」

（上 七）

若いということは、一般には、活動性や能動性に満ちていることと受け止められる。「私」が自ら「先生」に関わろうとして「先生」の家を頻繁に訪ねて行っているような行動は、その典型と捉えられるだろう。ところが、「先生」は、そうした行動が青年期にある「私」の淋しさに根差しているとして、自分にはあなたの淋しさを根元から引き抜いてあげられないと言っている。

また、その後日には、そうして「私」が「先生」を訪ねて来ることを、「恋に上る階段」なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」（上 十三）と言っている。「私」が「先生」の所にやって来ることと異性を求めることとは違うのではないかと言い返しても、「先生」はいや同じことだと断言している。

そして、ついには、この淋しさについて、「先生」は次のように語るのである。

「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

（上 十四）

「自由と独立と己れとに充ちた現代」とは、「先生」と「私」が生きている近代であり、わが国が西洋文明から多大な影響を受けた明治時代である。それ以前の、出自や身分によって人生が決まってしまう時代とは異なって、個人が自らの意志に基づいて自律的に生きられるようになった時代である。けれども、「先生」は、そうした時代に生きているわれわれは、淋しさを味わわなくてはならないと言う。

「私」は、そういう淋しい「先生」にこそ、かえって惹きつけられる。「とどの詰りをいえば、教壇に立って私を指導してくれる人々よりもただ独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった」（上 十四）。臨床心理の領域には「時代の病を引き受ける」という言い方がある。「私」には、「先生」が近代人の代表であるかのように、淋しさを積極的に引き受けて生きているように感じられるのである。

だが、どうして「自由と独立と己れとに充ちた現代」に生きることは淋しいのだろうか。「先生」は、その理由を語ってはいないが、われわれとしては、近代人ならば味わわなくてはならないという淋しさがどういう性質のものを是非とも知りたい。実は、それを知る手がかりがあるのだ。漱石は、『ころ』を連載し終えた1914年の晩秋に、学習院において「私の個人主義」と題する講演を行っている³。手がかりになるのは、その内容である。

講演の聴衆は、学習院の生徒たちである。漱石は、若い彼らに対して、自分の進むべき道を自ら探り当てて、その道を歩んで行くことの必要性を説いた上で、次のように語っている。

個人主義、私のここに述べる個人主義というものは、……他の存在を尊敬すると同時に自分の

存在を尊敬するというのが私の解釈なのですから、立派な主義だろうと私は考えているのです。

もっと解り易くいえば、党派心がなくて理非がある主義なのです。朋党を結び団隊を作って、権力や金力のために盲動しないという事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋しさも潜んでいるのです。既に党派でない以上、我は私の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。⁴

ここで漱石の言っている淋しさには、自分の進むべき道を探り当てるのは自分をおいて他になく、その道を歩んで行くのは他ならぬこの自分であるという、言わば「自己形成」についての強くて厳しい覚悟が込められているように思われる。

そして、漱石は、自分の「自己形成」の自由を尊重しようとするならば、他者の「自己形成」の自由を同等に尊重することが必要であることに注意を促すとともに、それには淋しさが伴って当然であると述べている。

私は意見の相違はいかに親しい間柄でも、どうする事も出来ないと思っていましたから、私の家に入出入りをする若い人達に助言はしても、その人々の意見の発表に抑圧を加えるような事は、他に重大な理由のない限り、決して遣った事がないのです。私は他の存在をそれほど認めている、すなわち他にそれだけの自由を与えているのです。だから向うの気が進まないのに、いくら私が汚辱を感じるような事があっても、決して助力は頼めないのです。そこが個人主義の淋しさです。個人主義は人を目標として向背を決する前に、まず理非を明らかに、去就を定めるのだから、ある場合にはたった一人ぼっちになって、淋しい心持がするのです。それはそのはずです。檳榔木でも束になっていれば心丈夫ですから。⁵

ここで漱石が語っている態度は、『こころ』における「先生」の「私」に対するかわり方と重なっているとは言えないだろうか。現代に生きるわれわれからすれば、『こころ』の「先生」は、先生らしくは見えない孤高の人である。けれども、「先生」が「私」に伝えようとしているのは、けっして風変わりなことではなく、「自己形成」に向かうときの凛とした態度なのではなかろうか。

2 両親的なものの訣別

大学を卒業した「私」は、「先生」夫妻にいとまを告げて帰省する。「中 両親と私」の舞台は、「私」の郷里の実家である。すでに「上」のなかで、「私」の父親には腎臓病の持病があり、卒倒したとの知らせを受けて、「私」が学期の途中に急遽帰省する場面が描かれていた。

卒業して帰省してみると、父親は思いの外に元気だった。それどころか、近在の有縁の人々を呼んで「私」の卒業祝いをしたいと言い出した。大学を卒業した人がまだ珍しかった頃のことではあるが、「私」は帰った日からこんなことになるのを心のうちで恐れていた。「私」はすぐさま断ったが、両親は聞き入れようとしなかった。

「呼ばなくっても好いが、呼ばないとまた何とかいうから」

これは父の言葉であった。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分たちの予想通りにならないと、すぐ何とかいいたがる人々であった。

「東京と違って田舎は蒼蠅^{うるさ}いからね」

父はこうもいった。

「御父^{おとう}さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えた。（中 三）

この言葉にあらわれているのは、両親の行動の基準は、「世間」に容認されるかどうかだということである。両親からすると、わが子が大学を卒業したということは、自分たちがそのなかで生きている「世間」に認知してもらうべきことなのである。

これと対照的な生き方をしているのが「先生」である。「先生」は、「世間」のことなど、まったく意に介さない。自分の行動を「世間」に左右されることがない。「私」が「先生」に惹きつけられるのは、ここである。

私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏^{まと}め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。（上 十五）

先にふれた「私の個人主義」とする講演のなかで、漱石は、「自己本位」という言葉を自分の手に握ってから大変強くなったと語り、次のように言う。

もし貴方がたのうちで既に自力で切り開いた道を持っている方は例外であり、また他の後^{ひと}に従って、それで満足して、在来の古い道を進んで行く人も悪いとは決して申しませんが、（自己に安心と自信がしっかり附随^{つるはし}しているならば、）しかしもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分の鶴嘴^{つるはし}で掘り当てる所まで進んで行かなくては行けないでしょう。⁶

漱石は、これからの時代を生きていく若者たちに、「自分の酒を人に飲んで貰って、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてしまういわゆる人真似」⁷ ずくめの「他人本位」ではなく、「自己本位」を追求することがあなた方自身の幸福のために必要であると説いた。この「他人本位」と「自己本位」とのちがいが、言い換えれば「他律志向」と「自律志向」とのちがいがこそが、「私」の両親の生き方と「先生」の生き方とのコントラストを生み出しているのであり、「私」が選び取るうとしているのは、無論、後者なのである。

結局のところ、卒業祝いは明治天皇の重体の報道を受けて取り止めることになった。けれども、両親の「私」に対する期待は、それだけにとどまらなかった。

私は二人が私に対して有^もっている過分な希望を読んだ。迂闊^{うかつ}な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。（中 六）

「私」の母親は、「御前のよく先生々々という方にでも御願したら好いじゃないか。こんな時こそ」（中六）と、「先生」に宛てて仕事の紹介を頼む手紙を書くようにすすめた。「私」は、「先生」がそのような依頼に応ずるはずがないと思いながら手紙を書いた。なぜなら、「先生」は、職に就いている人でも社交的な人でもなかったからである。その上、「私」には、大学を卒業する前、「先生」と一緒に散歩に出た際に次のように忠告されたことがあった。

「君のうちに財産があるなら、今のうちに能く始末をつけてもらって置かないと不可いと思うがね、余計な御世話だけれども。君の御父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰って置くようにしたらどうですか。万一の事があったあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

（上 二十八）

「先生」は、「私」の卒業祝いを自宅で催してくれた際にも、この忠告を繰り返している。読者は、「先生」自身が職に就かずに生活していることからこのような忠告をしたのだろうと考えて、さしたる注意を払わずに読み流してしまうかもしれない。だが、この忠告は、「私」に対するものとして、非常に重要な意味を含んでいるのではなかろうか。

漱石は、明治44（1911）年の夏に、「道楽と職業」という講演を行っている。このなかで漱石は、職業というものは、根本的に人のためのするものであり、自分の思いどおりになるものではないが、例外的な職業があり、科学者、哲学者、芸術家がそれであると述べている。

科学者哲学者もしくは芸術家の類が職業として優に存在し得るかは疑問として、これは自己本位でなければ到底成功しないことだけは明かなようであります。何故なればこれらが人のためにすると己というものは無くなってしまふからであります。ことに芸術家で己の無い芸術家は蟬の脱殻然で、ほとんど役に立たない。自分に気の乗った作が出来なくてただ人に迎えられたい一心で遣る仕事には自己という精神が籠るはずがない。すべてが借り物になって魂の宿る余地がなくなるばかりです。⁸

したがって、漱石は、これらの職業に就く者は、家に財産があるか、政府の保護、個人の保護があるかしないかぎり、生計を立てられないと言う。

大学を卒業した「私」は、これからどうしようとしているのか。そのことを「先生」の奥さんから聞かれた「私」は、「本当いうと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がない位なんですから。」（上 三十三）と返事をしている。ただ、卒業論文の執筆にあたって「先生」にその問題の選択や読むべき本について質問していることや（上 二十五）、帰省する前に洋書を扱う書店へ行って実家に滞在中にする仕事に必要な書物を探していることからすると（上 三十六）、「私」は学問の道を進もうとしていると推測することができ、「先生」はそれゆえに「私」に財産相続についての実際的な忠告をしたと考えることができるのである。

そうであるとすれば、「私」が大学を卒業して職に就くことに対する捉え方が、「私」の両親と「先生」とでは著しく懸け離れており、ここでもコントラストを描いていると言わなければならない。「私」の両親はそのことによって相当の地位や収入が得られることを期待しているが、「先生」の方では「私」が地位や収入と縁遠い厳しい道のとば口に立ったとしか思えないからである。

「中」の最後では、「私」の父親が危篤に陥ったなかで、「先生」からの長い手紙が届く。それをめくり読みするうちに「この手紙があなたの手に落ちる頃^{ころ}には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」（中 十八）という句を目にした「私」は、「先生」の安否を確かめるために、勝手口から家を出て、東京行きの汽車に飛び乗ってしまう。

この場面について、岩波文庫版『こころ』の解説者である作家の古井由吉は、次のように書いている。

明日も知れぬ実の親を放って、心の親の運命へたちまち駆けつけるというのは、若さの情熱とは言いながら、近年身内の老病に苦しめられることの切になった年齢の者の目には、どうしても死のかさとして映る。この運びによって、作品の内の死が、虚構の中へ浮きがちになりはしないか。作中の「先生」が「私」に生涯の秘密を告白する決意に至ったのは、この青年の精神の深さを見こんだ上のことのはずであるから、作品の要^{かなめ}というべきこの箇所^{こころ}で青年のこの行為を見せつけられては、読む側としては、疑念は順々に、作品の全体へ及んでいきかねない。⁹

このように感じる読者は、けっして少なくないだろう。だが、しかし、この「中 両親と私」は、これまでに見てきたことから分かるように、東京の大学で学び「先生」と出会った後の「私」が、郷里の両親のことをどんなふうに捉えているかを、「先生」と対照的に描き出している。そのことによって、近代人である「先生」の生き方や考え方を鮮明に浮き上がらせようとしているのである。両親のことはネガで、先生のがポジである。そうして、「私」は、両親のような「他人本位」の生き方ではなく、「先生」のような「自己本位」の生き方を今まさに選び取ろうとしているのである。実の親を放って東京行きの汽車に飛び乗るのは、そのことを象徴する場面としてどうしても描かれなければならないのではなかろうか。論者にはそのように思われる。

3 「自己本位」というアポリア

「下 先生と遺書」は、「先生」が「私」に宛てて書いた長い手紙である。「私」は、大学を卒業する前、「先生」と一緒に散歩に出たことがあった。この時、「先生」は、「私」に向かって「あなたは本当に真面目なんですか」と念を押した上で、それまで伏せてきた自分の過去について、適当な時期が来たら「私」に話すという約束をしていた（上 三十一）。「私」が大学を卒業して帰省している間に、「先生」から「私」に電報が届いた。それには「ちょっと会いたいに来られるかという意味が簡単に書いてあった」（中 十二）。実は、「先生」は、自分の過去を「私」に会って話そうとしていたのである。しかし、「私」は、父親の症状が日増しに悪化しつつあったために、東京へは出られなかった。そこで、「先生」は、「私」に会って自分の過去を語るのではなく、それを手紙に書いて伝えることにしたのだった。

もしも、当初「先生」が考えていたように、「先生」が「私」に会って自分の過去について語っていたならば、『こころ』の「下」は、「先生」と「私」との対話になっていただろう。そして、われわれがもっとも関心を寄せている、「私」は「先生」からいったい何を学んだかということが、「私」の言葉を通して明らかになったことだろう。だが、漱石は『こころ』をそんなふうを書くことはしなかった。

始めは貴方に会って話をする気でいたのですが、書いて見ると、かえってその方が自分を^{はっきり}判然^{えが}描き出す事が出来たような心持がして^{うれ}嬉しいのです。(下 五十六)

これは、手紙の末尾の方で「先生」が書いている文であるが、自分の過去を書き終えた「先生」の思いであると同時に、長編小説『こころ』の最終部を書いた時の漱石の思いでもあるのだろう。おそらく「先生」が、ここから何を攫み取るかはこれを読んだ「貴方＝青年」が考えればよいことだと思っていたように、おそらく漱石も、ここから何を攫み取るかはこれを読んだ「貴方＝読者」が考えればよいことだと思っていたのではなかろうか。そのように考えて、以下、「下 先生と遺書」について考察することにしよう。

手紙では、「先生」が地方の由緒ある家の一人っ子であること、早くに両親を伝染病で亡くしたこと、家の財産を信託していた叔父に管理してもらい東京の高等学校に進学したことが語られる。当時の慣習からすると、「先生」は戸主として家を継ぐ立場にあったということだ。そのため、「先生」は、叔父から郷里に帰ってきて自分の娘と結婚し家を継ぐことを求められるが、学問を志して東京へ出たばかりであり、叔父の娘に対する恋愛感情もなかったため、それを断った。その後、「先生」の相続した財産のかなりの部分がこの叔父によって横領されたことが明らかになる。この時、「先生」は、叔父とのかかわりを断って、二度と郷里には帰らないことにした。

今日のわれわれからすれば、「先生」のとった行動はもっとも至極だろう。しかし、これは、前後の文脈から考えると明治中期のことである。当時としては、家を継ぐ立場にある者が家を捨てて故郷を離れるということは、たとえいかなる理由があったにせよ、極めて異例の個人的な決断であったと見るべきであり、「先生」が青年の頃から「自己本位」であったということを示しているのである。むろん、この「自己本位」とは、先にも見たように、自分勝手や利己主義という意味ではない。慣習や権威や周囲の人間に左右されることなく、自分の進むべき道を自分で探り当てて進んで行くという意味である。

ここから先、「先生」が手紙に書いていることのほとんどは、「先生」が子どもの頃から学生時代に至るまで親しくしてきた「K」とのことである。「K」は、真宗の寺の次男坊で、中学生の時に医者の子の養子になった。「先生」と「K」とは、同じ所で生まれ育ち、一緒に東京の高等学校に進学した。「K」の養家は医者にするつもりで「K」を東京へ出したが、中学生の頃から宗教や哲学に親しんでいた「K」は医者にはならないと心に決めていた。

私は彼に向って、それでは養父母を^{あざ}欺むくと同じ事ではないかと詰りました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、その位の事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、恐らく彼にも^{よく}解っていないかつたでしょう。私は無論解ったとはいえません。しかし年の若い私たちには、この^{ばくぜん}漠然とした言葉が^{たっ}尊とく響いたのです。そちらの方へ動いて行こうとする^{いきぐみ}意気組に^{いや}卑しい所の見えるはずはありません。私はKの説に賛成しました。

(下 十九)

「先生」の親友「K」もまた、「自己本位」の人であったということ、このことが非常に重要である。「先生」と「K」とは、「自己形成」において目指す方向性を共有していたのである。しかも、「K」の「自己本位」は、「先生」以上に徹底していた。

寺に生れた彼は、常に精進^{しょうじん}という言葉を使いました。そうして彼の行為動作^{ことごと}は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬^{いけい}していました。

（下 十九）

やがて「K」が養家の期待に背いて医者になるのと異なる道を進んでいることを養家に白状すると、「K」は養家から学資を止められて離縁される。「K」は、自分で学資を稼ぎながら学業を継続するが、過労と焦燥から神経衰弱に陥ってしまう。「先生」は、「K」が行きたい道を行こうとした時に賛成した責任感から、自分の住んでいる賄い付きの下宿に「K」を呼び寄せた。

この下宿の奥さんには年頃の御嬢さんがいて、「先生」はその御嬢さんのことを愛していた。「K」が移り住んできた当初の「先生」は、「今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠^{こも}っていたようなKの心が、段々打ち解けて来る」（下 二十五）ことを好ましく感じていたが、「K」が御嬢さんと親しくなっていくのを見ているとしだいに不安になってくる。

彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見てください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。……そうして、すぐ失策^{しせつ}したと思いました。先を越^{せん}されたなと思いました。

（下 三十六）

この恋の告白は、「先生」にとっては全く予想しないことだった。なぜなら、「K」は「自己本位」の人であったからだ。「道のためには凡^{すべ}てを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、摂^{せつ}慾や禁^{きん}慾は無論、たとい慾を離れた恋そのものでも道の妨害^{さまたげ}になる」（下 四十一）はずだからである。そして、「K」自身にとっても、自分がこんなふう恋愛の淵に陥ることは全く思ってもみないことだった。「K」は、意志の力で自分自身を律してきた人間である。ところが、御嬢さんに恋い焦がれる気持ちは、自分でどうすることもできない。

「先生」は、「K」から散歩に誘われて、今の自分がどんなふうに見えているかを訊ねられる。「K」は、この時、「先生」が御嬢さんを愛していて結婚まで考えていることをまだ知らないのだ。

私がKに向って、この際何^なんで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼は何時^{いつ}にも似ない悄然^{しょうぜん}とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいといいました。そうして迷っているから自分で自分が分からなくなってしまったので、私に公平な批評を求めるより外^{ほか}に仕方がないといいました。私は隙^すかさず迷うという意味を聞き糺^{ただ}しました。彼は進んで可^いいか退^{しり}ぞいて可^いいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退ぞこうと思えば退ぞけるのかと聞きました。すると彼の言葉が其所で不意^{つま}に行き詰りました。彼はただ苦しいといっただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。

（下 四十）

自分の弱さに直面^{うろた}して狼狽^{うろた}える「K」に、「先生」は何を言ったのか。

私は先^まず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」といい放ちました。これは二人で房州^{ぼうしゅう}を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、

再び彼に投げ返したのです。……私はその一言でKの前に横たわる恋の行手を塞ごうとしたのです。……私はこの一言で、彼が折角積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。かえってそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。

(下 四十一)

「K」は、「僕は馬鹿だ」と力のない声で答え、「もうその話は止めよう」と言った。それでも、「先生」は容赦することなく、とどめを刺す。

彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛な所がありました。私はちょっと挨拶が出来なかったのです。するとKは、「止めてくれ」と今度は頼むようにいい直しました。私はその時彼に向って残酷な答を与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。

「止めてくれって、僕がいい出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

……すると彼は突然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「覚悟、——覚悟ならない事もない」と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

(下 四十二)

その後、「先生」は、「K」を出し抜いて、下宿の奥さんに御嬢さんをくださいと申し出て承諾を得た¹⁰。自分と御嬢さんが結婚することになったことをすぐにも「K」に知らせるべきなのに、打ち明けないまま日々を過ごす。そうこうしているうちに、奥さんの口から結婚のことが「K」に伝わってしまう。その数日後、「K」は自室で自らの命を絶ってしまった。

「K」の亡き後、「先生」は、「K」に対する罪悪感に苛まれながら、妻のために命を引きずるようにして生きてきた。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分は貴方にこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたと思って下さい。……この手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。

(下 五十六)

「私（青年）」は、この「先生」の過去についての告白から、いったい何を学び得たのだろうか。以下、二つのことに焦点を絞って考察しよう。

「私」は「先生」の借り物ではない「自己本位」な生き方に惹かれているが、それはすでに「先生」が若い時分からのことだった。その「先生」には、「K」というこれまた「自己本位」な生き方を貫く親友がいた。「先生」と「K」とは、苦難に直面しながらも、互いに刺戟し合い励まし合うことで、自分の進むべき道を自分で探り当て、その道を突き進もうとしていた。ところが、まず「先生」が下宿の御嬢さんに恋をした。御嬢さんにどうしようもなく惹きつけられ、「先生」の「自己本位」の生き方は揺らいでしまう。このタイミングで、「先生」は、ある事情から、親友「K」を自分の下宿に呼び寄せる。「K」は筋金入りの「自己本位」の人だから、自分のようになってしまふことはない。「先生」

としてはおそらくそう考えてのことだったが、その「K」もまた、御嬢さんに恋をして、「自己本位」の生き方が揺らいでしまう。

このことから学ぶうことは、近代の社会では「人間形成」の過程において「他人本位」ではなく「自己本位」であることが求められるが、「自己本位」の「人間形成」を図る上で恋愛が大きな試練になるということである。恋愛は、ある他者にどうしても惹きつけられるというかたちで生じ、その他者との関係を育んでいこうとすることなのだから、「自己本位」だけでは成就することがない。ところが、青年期にある人たちは、自分がこれから進むべき道を自分で探り当て、その道を突き進んでいかなければならない。「自己本位」と恋愛とは、近代の社会に生きる人間にとって、ともに重要な課題であるが、これら二つのことをともに追求することは、誰にとっても容易ならざることである。だからこそ、漱石は、『こころ』ばかりでなく、自らの多くの作品のなかで、恋愛に苦しむ人々の姿を繰り返し描いたのではなかろうか。

もう一つ、「私（青年）」は、「先生」と「K」とがともに御嬢さんに恋をしたとしても、そのことから「K」が、そして「先生」が自死に至らねばならなかった理由について、この手紙を読んでからも何度も考えたのではなかろうか。青年期にある親しい者同士が同一の異性に恋をしてしまうことは、それほど珍しいことではない。さらに、一方が抜け駆けするようにして恋を成就させ、他方が失恋をするということも、なくはないだろう。だが、そこから自死に至ったというのは、尋常のことではない。ところが、「K」は、そして「先生」は自死を選んでしまった。どうしてなのか。

二人の悲劇から学ぶうことは、「自己本位」の追求には限界点があるということ、これである。漱石は、「私の個人主義」のなかで、若者たちに向かって、こう語った。

ああここにおれの進むべき道があった！　ようやく掘り当てた！　こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事が出来るのでしょうか。容易に打ち壊されない自信が、その叫び声とともにむくむく首を擡^{もた}げて来るのではありませんか。……貴方がた自身の幸福のために、それが絶対に必要じゃないかと思うから申上げるのです。¹¹

これこそ近代の人間形成観を端的に示す言葉である。近代以降の社会では、自分で自分の進むべき道を選び取ること、その道を行くことの必然性を自らが構成して力強く歩んで行くことが必要とされる。だがしかし、自分の進むべき道を掘り当てられたら安心できるかというと、そうともかぎらないのだ。人生には、ようやく掘り当てた自分の道を進めなくなる時がある。自信と安心を得て突き進んでいた道を思いがけないかたちで歩めなくなる時がある。この時、「自己本位」を究めてきた人ほど、^{にっ}二進も三進も行かなくなり、潰れてしまいかねないのである。まさしく「K」がそうであった。

「先生」は、「K」の御嬢さんへの恋の告白を聞いた後、次のように語っている。

Kが古い自分をさらりと投げ出して、一意^{いちい}に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ないほど尊^{たつ}とい過去があったからです。……Kはどうしてもちょっと踏み留^{とど}まって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示^{みち}す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。

（下 四十三）

この「先生」の見方が当たっていたとしても、「K」には過去が指し示す路を歩むしかなかったという事は決してない。それは「K」の思い込みである。「K」には御嬢さんとの恋を成就させようとする道が確かにあった。

われわれは、たとえ今の自分が自分の進むべき道を歩いていたとしても、「今歩いているのとは別の道もありえた」と思考する柔軟性を残しておいた方がいい。自分の進むべき道をあまりにもリジッドに捉えすぎてしまうと、思いがけない出来事に対応できなくなってしまうからである。

真面目な「K」に対して、今まで君が歩いてきた道とちがって御嬢さんとの恋を成就させようとする道があることを論ず友人がいたならば、「K」は自死には至らなかったかもしれない。ところが、「K」の唯一に近い友人であった「先生」は、「一体君は平生の主張をどうするつもりなのか」という言葉で、「K」が今まで通りの道を歩んで行くしかないと思ひ込むことを強化してしまった。ここに欠けていたのは、「今までとは別の道がありうる」ことを知らせる他者である。さらに、親友「K」を失った後の「先生」もまた、「今までとは別の道がありうる」ことを知らせる他者との出会いに恵まれなかった。

二人の悲劇は、「自己本位」の徹底的な追求には限界があるということ、「自己本位」の追求は逆説的にも他者の存在を必要とするということを示しているのである。

注

- 1 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%93%E3%82%9D%E3%82%8D> (最終閲覧日: 2024年2月10日)
- 2 本論の『こころ』のテキストには、岩波文庫版(1989年改版)を用いる。岩波文庫版は、新聞連載後に発刊された単行本と同様、小説全体を「上」「中」「下」に区切った形がとられている。
- 3 漱石は、この講演の前半で、自らの半生の来歴を若い人たちに語っている。それは、『こころ』の「下 先生と遺書」において、「先生」が自分の過去を青年に語っているのと二重写しになって見える。
- 4 夏目漱石(1978)『私の個人主義』講談社 pp.150-151
- 5 同上 pp.152-153。引用箇所の前ところで、漱石は、かつて新聞の文芸欄を担当していた際には、自分の小説を酷評した文章もそこに掲載したと述べている。
- 6 同上 p.138
- 7 同上 p.134
- 8 同上 pp.33-34
- 9 古井由吉「解説」夏目漱石(1989)『こころ』岩波書店 p.292
- 10 奥さんが「本人の意^{いこう}蘊さえたしかめるに及ばない」と言ったことに対して、「先生」は、「そんな点になると、学問をした私の方が、かえって形式に拘泥する位に思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしい」と奥さんに注意したと書いている。「自己本位」の「先生」にとってみれば、やはり本人の意志が肝心なのである。「先生」の注意に対して、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子を遣るはずがありませんから」と答えている(下 四十五)。
- 11 夏目漱石(1978)『私の個人主義』講談社 pp.139-140